



蝶



天文学の発生



橋のある風景



目の記憶 手の記憶



NO.32 2000.7

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会

# アピアランス



aaca会員 理事  
人形作家  
SAYUME OKUDA  
**奥田 小由女**  
東京都練馬区富士見台2-22-10  
03-3990-5522

「蝶」  
65.0×37.0×25.0

蝶が神秘的な孵化によって美しい姿に生れ変わる瞬間の美を女性の姿をかりて表現してみました。衣装の文様も蝶の孵化をイメージして考案致しました。やわらかな輝きのある色胡粉仕上げと指に止まる小さな蝶に苦心しました。



aaca会員  
彫刻家  
MOTOTAKA NAKAMURA  
**中村 元隆**  
東京都国分寺市西町2-17-1  
042-577-1378

「天文学の発生」  
日本外国語専門学校  
140×170×150cm

世界各地の古代遺跡に見られる巨大な天文観測のための建造物をモチーフにしました。その稚拙だけれど力強く、非科学的だけれど説得力のある形に惹かれました。作品はブロンズにキャストし、設置しました。



aaca会員 (有) 彫刻工房 十方舎  
KENJI TODA  
**富田 憲二**  
東京都葛飾区柴又5-31-18  
TEL 03-5668-3417

「橋のある風景」  
綾瀬市庁舎 (神奈川県)  
2800mmH 6000mmW 800mmD 3垂

土を削り、運び、堆積させ長い時間をかけて風景をつくり出した水の形成力と破壊力に心を動かされます。この絶えることのない自然の力とうまく折り合いをつけたいと願っているところです。橋はまさに自然と文明が交差する十字路です。



aaca会員  
ファイバー造形家  
KIYOMI NAKAMURA  
**中村 清美**  
東京都板橋区赤塚新町3-25-16  
TEL 03-3939-6530

「目の記憶、手の記憶」  
建築会館 2000年アートパラダイスNo.4展  
サイズ860×640×50%

2000年6月、4回目になる建築会館での「アートパラダイス展」出品作品の1つです。私のテーマとする「複合する素材」は空間、光、時間などの非物質材料も取り入れて作品制作に取り組んでゆきたいと考えています

## CONTENTS

文化・芸術と都市空間	1
時代の華一輪	4
aacaトーク	7

### ■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。  
事務局までお問い合わせください。  
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行います  
のでご了承下さい。

発行：社団法人 日本建築美術工芸協会  
Phone 03-3457-7998  
Fax 03-3457-1598  
〒108-0014  
東京都港区芝5-26-20  
建築会館 6F

振替：00110-2-365085

編集：(社) 日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員長 玉見 満

副委員長 高部多恵子

北村孝昭、石田真人、山崎輝子

浅野由紀夫、長谷川亨

事務局 長 伊藤留雄

制作協力：中栄印刷工業株式会社

## 「都市の美空間創造」

### 1 はじめに

科学技術が驚異的に進歩した20世紀を振り返った時、人類が手にした財産の一つに宇宙からの視座、命を育む惑星地球の美しい姿を宇宙から確認することができるようになったこと、人類が宇宙からの発想を手中にしたことが挙げられるように思う。悠久の宇宙の中に輝く水と命の惑星「地球」の神秘的な美しさについては、宇宙飛行士によって語られているが、この美しい空間はほんの薄い大気に守られている事も確認した。表現を変えれば、薄い大気に囲まれガードされた地球は、ガードされた空間・場所、ガーデン・園を意味していると捉えることができるように思う。

最近のガーデニングブームを考えた時、この花や緑に彩られた水と緑の大地「園」を、パラダイス、エデンの園、浄土、ガーデンとして理解し、そこを沢山の花で美しく守りながら営みを続けることの重要性を、社会全体が認識しつつあるのではないかとさえ思わせるものがある。人類を始め多様な生物の生命活動の基盤である「園」、総合環境の仕組みを考えながら生活する時代へと価値観が変換する時代になった。そんな中で、最近のガーデニングブームは、身近に小さな花の空間を創造しそこに癒しを求める人々の願望のたかまりと見ることもできる。

20世紀における日本の都市空間を考えた時、都市の部分としての建物、サイン標識など小さな場所において空間調査・分析・設景などが進み、部分的にはデザイン密度が高くなってきたように見える。しかし、都市の総合景観としての美しさという面ではまだ不十分であるように思う。特に電柱による景観破壊、身障者を無視した歩道、など早急な解決が必要な醜悪な場面があまりにも多い。このような現象は、専門分野が余りにも細分化されすぎて、横断的、総合的な視座からの検討が不十分のため引き起こされる場合が多い。21世紀は、このような細分化された専門分野が縦割りに理論武装して、行政主導で都市の構築を進めるだけでなく、より多様で多面的な場面にに対応するために総合性を持って、都市住民に喜ばれ、美しい園と呼ばれる都市空間創造の時代になりつつある。

### 2 新旧混在の都市空間：昆明

私は、1998～1999年にかけて6回にわたって中国雲南省昆明を、世界園芸博覧会の準備で訪問したが、その時、都市空間のあり方について考える機会を持った。

同じ中国といっても、首都北京、沿海部の上海、広東など、われわれに比較的馴染みのある都市と、雲南省のようなあまり馴染みの薄い所は、当然都市イメージの受け止め方は異なってくる。

雲南省についていえば、常に雲多き四川省の南、豊かな自然に恵まれた複雑な地形の大地に50に近い少数民族が、それぞれ独自の文化を育んできており、多様で多彩な文化、特に稲作・茶・漆・漢方薬などの文化を内包させながら醸し出す都市イメージと、その周辺の水田地域の姿には、ある意味で急峻で複雑な地形の日本との共通性がある故郷を共有しているような気にさせられた。

そんな中で、新型のベンツ、マフラーを引きずるようにして走るポンコツ自動車、その脇を口バの引く荷車と、無数の自転車が走り、公衆電話は見かけないが、多くの人が携帯電話を持参していて、まさにこの姿は、宇宙時代といわれる20世紀末と、封建的な19世紀末が混在・同居している場面は刺激的でさえあった。

このような国の現場の仕事ぶりを見た時、一見ルーズに見える作業の進め方の印に、不安定性の持つ多様性のようなものがあり、それが新鮮でヒューマンな創造的行為であるとさえ見える姿・仕組みがあって、科学技術が進歩した近代社会の常識とかけ離れているようでそうでない、非論理性の中にある文化・価値観が長い歴史を通じて醸成されてきた軌跡として思いを巡らすことができた。

このような姿から、アジア人共通の生活慣習や空間観、自然観が、わが国の都市空間形成へ与えた影響なども感じさせた。日本のように6000万台の電話を整備するために費やした膨大な電信電話工事などのエネルギーを消費せず、一足飛びに携帯電話を手にした国、しかし、これから自動車の普及が激しい中で建設が進むであろう道路、住宅などの建設を考えると、環境問題など、賢い選択をしてもらわなくてはとおせっかいを焼きたくもなる。巨大な中国が日本と同じ環境問題から回避するためには、アジア人共通の人と自然の関わり方のキーワード、アジア人の美意識の基礎ともいえる「花鳥

風月の心」が育まれてきた背景をアジア人全体が再認識してアジアから地球環境に対する強い思い入れとして世界に発信する考えがあっても良いのではないかと思う。

### 3 美空間の理解

国土庁は、21世紀の国土計画の理念に「庭園の島々」をキーワードとして採用した。この背景には、人々が安全で安心して暮らせる身近な生活空間から、国土・地域・都市にいたるまで、美しい「園」美空間を保全し創造することへの願望が込められていると理解した。

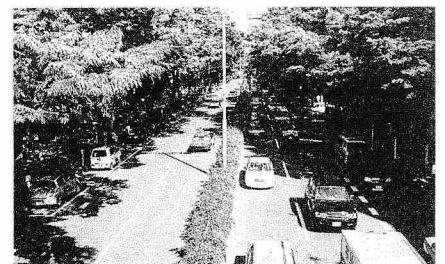
庭園のように美しい国土の実現には、「美」の概念について考える必要がある。

「広辞苑」によれば「美」は、知覚・感覚・情感を刺激して、内的快感を起こすもの「快」が生理的・個人的・偶然的・主観的であるのに対して、「美」は個人的利害関心から一応開放されており、より必然的・客観的・社会的である。としている

20世紀に人類が追って来た都市文明は、ある意味で「快」の追求にあったのではないか？アメニティー、快適など生理的、個人的、偶然的、主観的な「快」の追求に全エネルギーを投入してきたわが国において、現在はある程度の達成を成し遂げており、むしろこれ以上の「快」の追求は、地球の温暖化をはじめとする環境問題に直接的につながり、大きな環境問題を引き起こす原因になってきた。

日本列島には「快」の追求を求めて有史以来何回かの開発の歴史があった。縄文時代全国に大規模な古墳ができ、奈良時代には大仏殿を始め全国各地に国分寺の建設、江戸時代には三百数十箇所の築城と水田開発、20世紀には55年体制による日本列島改造など、人類の生存基盤が犯されかねないほどの環境破壊が進行した。21世紀を迎えその修復のため、人と自然の好ましい関係構築を如何に進めるかにかかわってきたが、美しい園、美空間創造はその基軸をなすものとする。

環境問題を引き起こす開発と保全の関



緑の都市空間 ～表参道～



係は、科学の進歩と、人口の増加の歴史と深く関わっている。人口の急増によって、かつて自然の恩恵を享受してきた人類が、或る限界を超えた時から自然を利用する立場から、自然を破壊する立場に立つようになり、いままで以上の個人的「快」の追求は根本的に考え直さなければならなくなった。

より公益的、社会的である都市空間に今後求められるものは、都市美の追求ではないか、ここではこの考え方を「都市の美空間創造」と位置づけその実現を次の世代に向けてのメッセージとして提起したい。

#### 4 都市の美空間創造

人々の身近な生活空間から、宇宙空間までの美しい空間を「美空間」と定義し、美空間の持続可能な保全と創造を目指すことを「美空間創造」とするならば、「都市の美空間創造」とは、都市の構造・機能・変化、さらに都市人の生活作法が自然の理に適い、人々の生活にとって総合環境としてバランスの取れた美しい園として有機的に結びついていくことができる空間、これを「都市の美空間」と仮に定め、以下に考えを進めてみたい。

1) 都市の美空間構造、都市空間を構成している要素を構造とするならば、都市景観の背景となる山、川、のような自然、超高層ビルなど各種の建物、橋、道路など人工的要素が複合的に混ざり合っ、都市の総合環境は構成されているが、こうした主に視覚的に捉えることができる都市のすべての構造的要素に「美」を求めていくことが「都市の美空間創造」の構造的意義であると考え。

#### 2) 都市の美空間機能

都市空間を構成している要素の間に生ずる各種の関係を機能とすれば、これは、

一般にはエネルギーの流れと、物質の循環システムという視覚的には捉えにくいものをさすといえる。20世紀に発達した、化石燃料のみに依存したエネルギーシステムや、大量生産、消費に見られる物質の非循環型システムは、持続可能な都市空間の実現に向けての阻害要因となっていることは周知の事実であるが、循環型で持続可能な都市環境を創造していくのが、「都市の美空間創造」の機能的意義であると考え。

#### 3) 都市の美空間変化

変化とは時間の流れである。都市の美空間概念について、広く一般の人に理解を広め、認知されることに時間をかけて努力を払いながら、時を重ね、醸成させていくことが変化的意義であると考え。

#### 4) 都市の生活作法

20世紀における近代主義は、アジア独自に受け継がれてきた道徳・倫理を身につける教育がおろそかにされがちではなかっただろうか？、最近の日本では殺伐な事件が後をたたない、悲しい限りである。美しい都市環境を皆で守り育てること、環境の意味などを幼い時から身につけさせる環境教育のあり方が問われるところであるが、このような環境教育のため、日本企業などの積極的参画が求められる時が来ているのではなかろうか？

#### 5) 環境保全の心

今でも日本の各地に神社がある。そこは大小を問わず境内が常にきれいに確保されている。この事は、日本人の心の奥に深く根差した神への畏敬・信仰の深さが思われる。そこには日本人の自然観、宇宙観、宗教観が感じられる。総理大臣でなければ森さんの「神の国」発言はあれほど騒がれなかっただろうと思う。

日本の国土に散財する多くの環境遺産を美空間として保全することの重要性を改めて痛感するものである。それと共に、身近な流れ、里山、山、巨木、巨石、花などの恵みの存在をよく理解し、これらの環境保全を持続させながら、都市に住む人々に触れられるようなプログラムの作成も忘れてはならないと思う。

#### 6) 環境創造

環境創造することについて

考えてみたい。創造するということは何か新しいものを造ることだけであろうか？

いたるところに彫刻をおいたりすることが文化的創造だと理解される傾向が最近多いように思う。今は、行き過ぎた過剰な施設などを都市空間から除去することが大切だということも意識すべきではないか。彫刻家はゴミを造るといわれぬようにしなくてはならない。何も足さない何も引かないという事が最高の環境創造といえるところもあることを意識すべきではなかろうか。

さらに、地域の個有性の発揮、多様性と統合性、少子・高齢化、NPO、NGOなどへの正当な評価、再生産デザイン(故ジョンテイルマン博士提唱)の実践なども環境創造にさいして意識されなくてはならないだろう。

#### 5 環境倫理の時代

今日の環境倫理の時代といわれる時代への流れを見ると次の事がいえる。

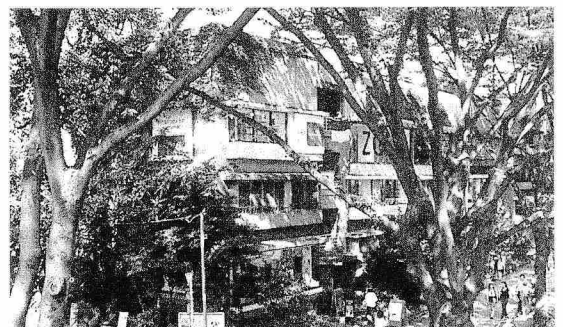
a : 19世紀後半～1960年代初期、自然保護の時代、国立公園の誕生。

b : 1960年代～70年代、環境保護、公害対策などの面で、日本は世界のトップレベルといわれるようになった。

c : 1980年代、環境対策という概念はできたが名ばかりであった。エコロジーの時代、

d : 21世紀は、環境倫理の時代といわれる。1992年、リオデジャネイロ会議、1993年、日本は環境基本法を制定、1994年環境基本計画法制定、「持続可能な発展」自然環境を保全しつつ経済成長も目指す。環境のグローバルスタンダードがいはれるようになった。ISOシリーズの起源となった。

環境倫理を前提とした環境ビジネスへの展開が始まった。持続的開発を意識した環境ビジネスの時代。欧米の企業は80年代から環境マネジメントシステムの



樹下に風致あり ～原宿・同潤会アパート

概念が生まれて日本より進んでいた。ISO、14000は、21世紀ビジネスのパスポートとなった。日本では1999年6月から開発規模の大小を問わずアセスメントが必要になった。今までのアセスメントは法律でなく条例によるものであり、開発事業、クライアントの要望に沿った、アワセメントなどと皮肉が言われた。

## 6 都市の美空間創造の今後

19世紀末から20世紀初頭に芽生えた近代都市計画の概念は、おおむね1世紀という長い年月をかけて緩やかに発達してきたが、果たして人間にとって都市は造れるのかという設問に答えきれていないように思う。確かに日本の20世紀は、経済力を背景として大型で多彩なプロジェクトを推進してきたが、これらの事業の多くは公共主体のものであり、民意・利用者の声が必ずしも反映していないことなどが指摘されるばかりか環境問題を引き起こしてしまった。さらに、国・自治体等の財政難から20世紀型の事業実施が継続できなくなりつつあり、社会資本整備の進め方にも大きな変化が見えるようになった。環境に配慮した物質循環を促進する法律も整備が進んだ今、循環型社会の実現に向けてますます循環資源の活用を前提とした美空間創造が大切となる。これらの社会変化に同調するように住民参加によるワークショップ方式の導入によるまちづくりなど、成熟社会における生活環境造りのありかたのアイデアが伺えるようになってきた。このような中で、都市の美空間創造の今後におけるキーワードを考えてみた。(未完)

### 1) 花鳥風月の暦

都市の美しさはその都市の立地によって醸し出されるが、真の美しさは視覚的な面だけでなく物質循環を前提とした仕組みと、地域特性が尊重・強調されていなくてはならない、自然環境がもたらす残雪の雪形、花の開花、多様な生き物の鳴き声、雷、夕立など天象等の事象と、生き物のライフスタイルが現代人の生活の中にいかに融合しているかなど、花鳥風月の歴を基盤にする。

### 2) 伝統・匠の技の伝承

過去の伝統を現代にコピーするのではなく、伝統的な資産を現代社会の中で呼吸させながら調和融合を繰り返しながら、新たな様式を生み出しつづける姿勢を持って、伝統を現代に置き換える。その



みなとみらい21  
～グランモール歩行空間～

ためにooo家といわれる人よりも、職人として匠の技を持った人が誇りを持って活躍できる体制作りが大切である。

### 3) ユニバーサルデザイン

バリアフリー、ノーマライゼーションなどの考え方は急速な社会的変化によって急速に意識されてきた。2020年には高齢者比率が25%を超えることが予測されていて、高齢者、障害者を含むすべての人々が安全で快適な生活が保証されるような都市環境の整備が求められているが、ユニバーサルデザインは、あらゆる人々が平等な立場で生活するための工夫を、あらゆる生活空間に対して配慮し、各種の商品デザインなどにも応用しようとするものである。

### 4) 環境造形

パブリックデザイン、パブリックアートなどの言葉が良く利用されるようになったがその実態は、まだ良く浮き上がっていないように思う。しかし、1991年度を初年度とするAACA賞の目的・主旨の一部に記された「人々の連携と協力を高めて、優れた芸術的環境を創ろうとする活動によって、創出された、芸術的環境(建築、庭園、公園緑地、インテリアその他を含む)を創造した個人またはグループの表彰」の定義が現状を適切に表現しているように思う。

### 5) 循環型社会と再生的デザイン

健全な物質循環を前提とした循環型社会造りのための「環境基本法」が成立して早くも7年、2000年5月には関連法案が次々と制定されて、物質循環を促進する体制は整いつつある。これらの法制度の整備によって、環境創造・持続的開発と再生的デザインの考え方は急速に普及すると思う。カルホルニア大学ポモナ校

の元教授、故ジヨン テイル ライル博士によって、提唱された再生的デザインであるが博士がこの発想にたどり着いたのは、日本の東北地方の農村を旅している時であったと伺った。時代的には江戸の生活、地域的には農村の中に息づく地域環境と一体化した生活の知恵など、都市が学ぶべきものは多い。

### 6) 防災・セキュリティ

1995年の阪神淡路大震災、2000年3月からの有珠山の爆発、いずれも文明の脆さを証明した。人知の及ばぬ大自然の営みに逆らうのではなく、自然と調和融合しながら安全で安心できる都市空間の確保を目指して、緑地、避難地、貯水池などの整備をまだまだ進めなければならない。

### 7) 特殊環境

巨大なビルの足元、屋上、壁面、地下さらには人工地盤、親水空間、人工法面など、反自然的な環境が増えている。これらの空間に如何に生き物の技術を応用して美しい空間としてゆくかが問われるとともに、今後の新しいビジネスチャンスの場ともいえる。

調査計画委員会のメンバーは、都市空間について、それぞれ日常的に考えていることをテーマにして書くようにという宿題を調査計画委員長の故守屋先生に頂いていた。せっかくの機会なのでじっくり時間をかけてご期待に沿えるよう意気込んでいたうちに守屋先生が西の国へ旅たれてしまった。守屋先生とお約束していたテーマは「都市空間とユニバーサルデザイン」であった。遅れた上に勝手にテーマも変えてしまって申し訳ありません。

「2000年5月」小林治人



# 時代の華一輪



aaca理事  
(照明デザイナー)  
石井幹子デザイン事務所  
MOTOKO ISHII  
石井 幹子  
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-11  
03-3353-5311

## 沖縄の夜ーサミットの光

私がはじめて沖縄を訪れたのは、27年前のことである。沖縄の本土返還を期して開催された1975年の〈沖縄海洋博覧会〉の会場照明の準備のために、現地へ出向いた。当時は空港からの道路も不備で、那覇空港からずい分と長い時間をかけて名護市の北にある会場予定の地まで辿りついた。

折しも初夏の気持のよい日で、青い空とさわやかな風、そして様々な濃淡の緑の中に、ブーゲンビリアの濃いローズ色の花や深紅のハイビスカスの花が咲きほこる中を、黒い大きな蝶々が飛びかう美しい南国の風景を満喫した。海辺には、岩陰のそこそこに白い浜があってアダ

の甘い香りが満ちていて、ここにどんな博覧会が計画されるのだろうかかと胸を躍らせたものである。

海に面した南北8キロ、東西1キロという広い会場の全体の夜景をデザインするというこの仕事は、当時照明デザインという未知な分野でもあり、なかんづくまだ30代そこそこの若い女性が携わるといったことは前代未聞で、博覧会協会やその周辺で危ぶむ声も大きく、仕事を開始するまでは、ずい分と苦勞をしたものである。

しかし、各方面への説得や組織づくりが終って、照明計画の仕事をはじめてみると、西側に海を望んだこの勝景の地に、月明りや星明りの光を意識しながらデザインを進めて行くことは、大変にやりが

いのある素晴らしいプロジェクトであった。思えば、私が都市的なスケールの仕事を目指すようになった契機はこの沖縄での経験がバネになっていたと思う。一昨年、再び縁あって沖縄金武町の街路灯整備の仕事をお引き受けした。延べ40kmもある道路照明を沖縄らしい光でデザインした。

そして、今度は沖縄ではじめて開催されるサミット会場の光を創るという好運なプロジェクトに恵まれた。部瀬名岬の先端に建てられた万国津梁館の夜景をデザインするものである。沖縄独特の大きな赤瓦の屋根、水と緑、そして海辺の棧橋等、サミットの開催を世界に発信出来る光となれば幸である。



光る海



万国津梁館

# 時代の華一輪



aaca会員  
(陶芸家)  
(株)河合紀陶房代表取締役社長  
TADASHI KAWAI  
河合 紀  
京都市山科区川田清水焼団地町12-1  
075-581-5550

## 自然に学ぶ

春に成ると、関西は黄砂が空を暗くする。大陸の奥地から、風に乗って砂は飛んで来る。数千里の旅を終えて、大阪、京都でも時に車に積って居る事がある。今年も黄砂はやって来た。今から四十年程前、私は政府からクエートに派遣され二月から三月に掛けて凡そ一ヶ月余り滞在した。春のクエートはトーズの訪れで始まる。トーズとは砂嵐で、戸のすき間から空気と共に砂が部屋に積もる。車のエンジンのピストンも砂を吸って、こすられ、痩せるとの事で、クエートのトーズは日本の黄砂と同様に自然のなせることである。

砂が風に乗って旅をするという事は、軽い砂であるに違いない。比重で言えば、0.4以下という事になる。

黄砂はあまり楽しいものではないが、軽いと言う事は大変面白いと気が付いた。砂は珪石が主原料で出来て居るから、耐火度もあり微細で空気に混和して、しかも中空であるに違いない。

砂漠で暮らした経験から、軽量の陶材は出来ないか研究を始めた。もともと陶器造りは科学と芸術の交点の仕事、それなら軽量陶材も出来るはずと数年の時間をかけて本格的に取り組んだ。

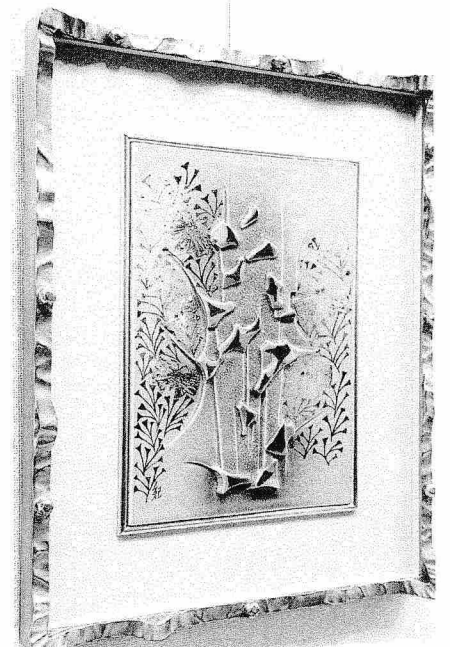
一般の陶磁器は軽いと言われる物で比重は2.4ぐらい、磁器質になると2.6ぐらいになる。

昨今は軽い文化の時代だと言われて居る。軽量陶は世界の砂漠の旅から研究を始めた。自然は天才で、色々な形で砂はある。軽くて耐火度があって採取可能で、粘土と混和しやすく、比重0.8ぐらいで、伝統的な陶枝一般に使えらるとすると、例えば建築の表皮材としてその利用面は無限に広がるはずと勇気を振って研究、漸く目的を達した。

比重が0.8から1.2（従来の1/3から1/2）で、大平面が得られ、青磁、辰砂、白磁に利用表現出来、染付、鉄画、金彩、赤絵と自在に使える陶材を漸く実成させ、特許を申請するまでに成った。この軽量陶材、「カルー陶」をよろしく。



水を張った大鉢に浮かぶ陶板  
「カルー陶」(比重0.8)



陶額「エメラルドで風に舞う」 ※カルー陶

# 時代の華一輪



aaca事業委員  
(プロデューサー)  
術サンアート ディレクション  
KATUKO SUGATA  
**菅田 カツ子**  
東京都新宿区市谷山伏町2-8-802  
TEL 03-3268-7730  
FAX 03-3268-7720

## 建物の中のアート

埼玉県川口市元郷2丁目という、かつての鋳物の街「キューポラのある街」と知られた町工場の後地に最近近代的な街に生れ変わろうとしている。

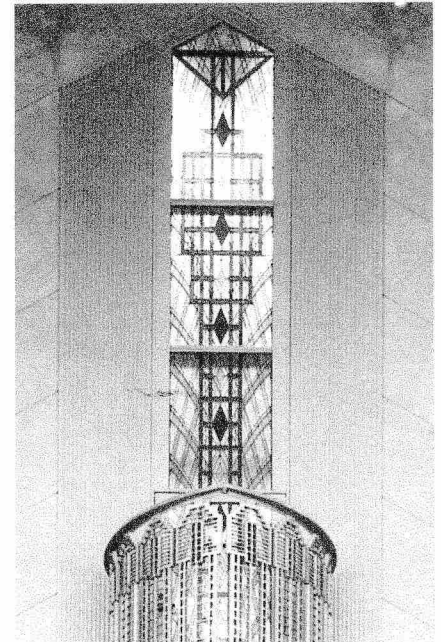
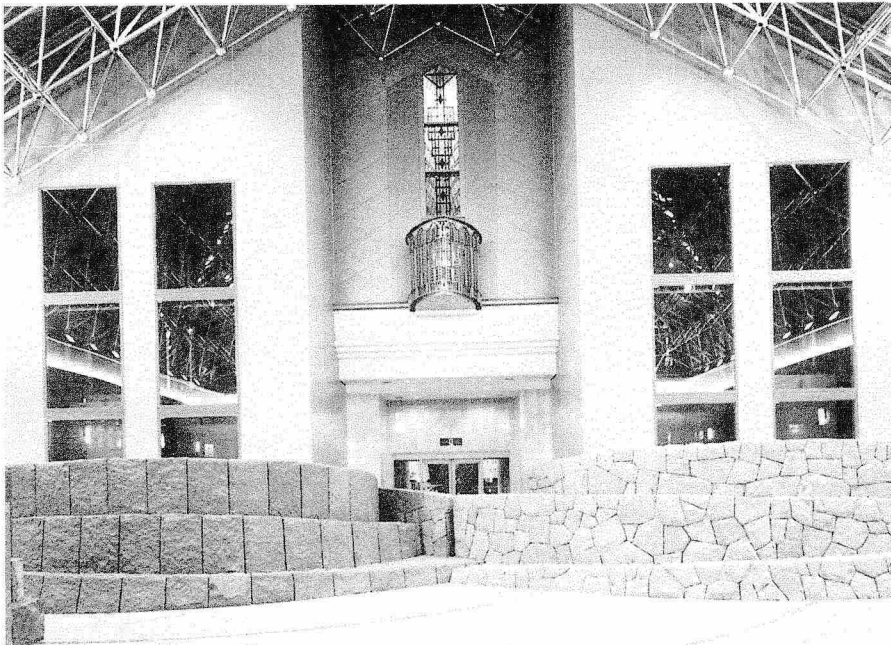
川口市も地下鉄南北線元郷駅と共に、このエリアを21世紀に向けての新たな新都心の、フラッグシップとなることを目標とした所に「エルザタワー55」と巨大な超高層住宅が計画された。今迄の超高層住宅の、より多数の住戸を、いかに物理的に積み重ねるではなく約10層ごとに街区を想定して特色づけた。例えばバンク分けされたEL動線を「大通り」廊下を「街路」のように街の構成と同じ様

な領域をベースに、最上階に集会所（コミュニティコア）や子供の遊び場（スカイポケット）を設け縦に伸びる住棟内の街並、立体的な住空間を取り入れた住宅、ロビーフロワーも、住人全員の玄関になるので、黄金の色シャンパンゴールドを使った誇りに思える様な優雅な黄金の色シャンパンゴールドを主色に、ステンドグラスのデザインをという事でした。住む人の幸せ多き建物で有れと願いを込めて、「黄金の輝き」と題して、両手を大きく広げ天高く迎ぎ建物の大きさをイメージしたものを中心にロマン輝くゴールドのグラデーションで階層の色分けの上から基本の色黄、紫、青、赤、緑、茶、黄と自分のフロアの大きな間違いなく着

ける事でしょう。

多勢の方々の出入の住人を見守る場所に納まって、気高く、誇らしげに皆様の安全を見守っているでしょう。

この頃の集合住宅も一昔前の隣りは何をする者その時代から、コミュニティフロワーに集まり、趣味の会が出来、子供の遊びが出来て多目的な場に集い、無感心時代が続いたが、近年世の中の生活も索漠としている時に、子供同志、親同志の楽しみ、苦しみを語り、癒の心、優しい心で子供と友達と近隣と接することが出来る住宅が出来た事を喜んでいます。



## 「日本・日時計の会」発足

去る、3月25日岐阜県美並村・日本まん真ん中センターにおいて全国50余名の会員構成のもとに「日本・日時計の会」が発足しました。“日時計”について興味のある方は、第1号会報をお送りしますので下記までご連絡ください。

〒167-0034 東京都杉並区桃井1-17-11

Tel・Fax03-5932-2664

小野行雄 (aaca会員・調査研究委員会委員)





aaca会員  
(環境造形作家)  
(株)スペースアーツ  
FUJIKO ABE  
**阿部 富士子**  
東京都港区赤坂7-5-27-701  
03-3505-5761

## 生活空間とアート

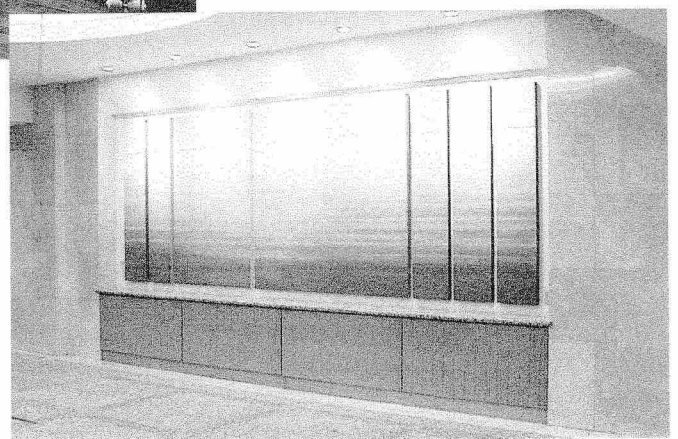
岩絵の具の美しさに心惹かれ、大学では日本画を専攻しました。日本画を学ぶ傍ら、京都の寺社・庭園をはじめ、ヨーロッパの宮殿・礼拝堂などを巡りましたが、美術館や博物館に収まった美術品と違い、実在する土地にある建築・空間と美術品との関係にとっても感動しました。美術品も収まるべき場所、空間にあつてこそ、最大限にその魅力を発揮できることを感じたからです。大学卒業後は、お決まりの公募展や団体展に出品するためのタブロー画を制作していましたが、毎年増え続ける大きな作品の保管場所は私を悩ますこととなりました。飾る場所や空間との関係を考慮しない「絵の中だけの世界」で制作されていることに次第に疑問を感じるようになったのです。美術は時の権力・宗教・政治などに影響されながら様々な変遷を遂げ、今日では自由な表現を勝ち取りました。また一般には入手しにくかった画材も産業革命以降現在では誰にでも容易に手に入

り、それに伴い美術作品もより身近なものになっています。しかしながら、数多くの建築家・美術家がいるなかで満足のいく美術作品を生活空間に取り入れて豊かに暮らしている人がどのくらいいるのでしょうか。美術館の非日常と違い生活空間は日常です。日本の生活様式も建物の変化に伴い変わりました。美術にもそれに伴った表現があるはず。自ずから、私が感動したあの「日本の伝統的な「空間と美術」の関係」を模索しながら、現代の生活空間に呼応できるアートの制作を始めるようになりました。海外にでると日本の文化のすばらしさを高く評価され戸惑うことがあります。国際化すればするほど日本人の感性を活かした制作をすることが、大事になってくると思います。

蛇足になりますが、97年末にオープンしたロサンゼルスにあるアメリカの石油王・故J.P.ゲティの美術館(ゲティ・センター)は私に新しい感動を与えてくれました。建築はリチャード・マイヤーでインテリアはティエリ・デスポン、庭園は現代彫刻家

として知られているロバート・アーウィン。この3者の登用には論議もあったようですが、昔マリブで見たゲティ美術館の印象が強かった私はその美術館スタイルの変貌に驚かされました。お客を迎え入れて美術に親んでもらう為のありとあらゆる手段・気遣いが事細かにハード面とソフト面に高度にとけ込み、それがまたとても自然であること。まさに信念を買き新たな美術館像を創り上げたクライアントの質の高さを見る思いでした。当然ながら美術作品もマリブの時とは違ってみえました。(勿論新しく購入した作品も多いのですが)

なかなか一気にこのクライアントのようにはなれませんが、生活する空間を建築家や美術家・工芸家・造園家をうまくコントロールし、強い意志と遊び心を持って自分の理想にあった生活スタイルを作りたいと思う人が増えれば、江戸時代花開いた固有文化に続く日本の新しい文化が生活空間から生まれるのではないかと期待しているのですが…。





aaca会員  
(建築家)  
SHIGENOBU HANZAWA  
**半澤 重信**  
東京都練馬区中村南3-1-10  
03-3999-5381

## 大切なものを護る **パートI** 「建築計画の立場から」

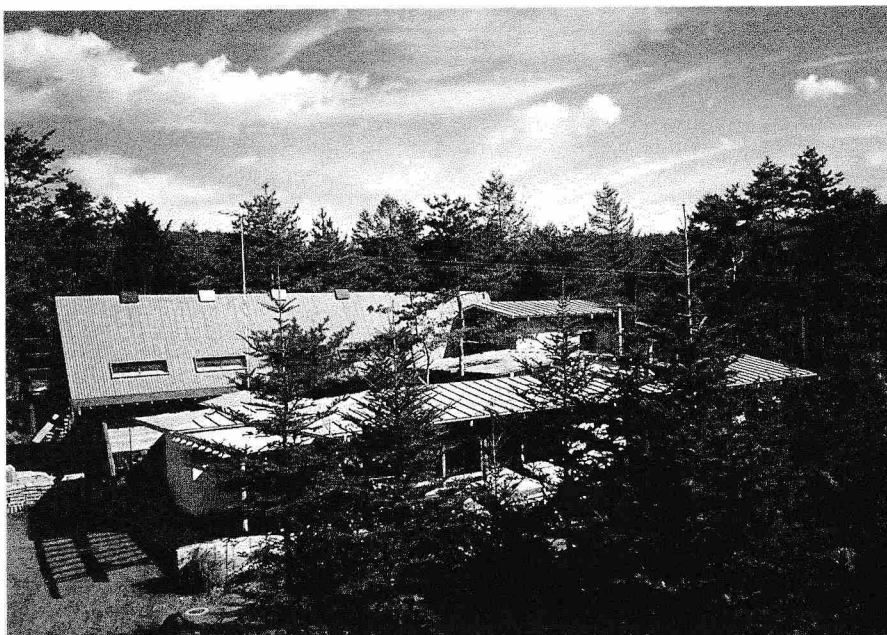
「軽井沢に技術系外国留学生の研修保養施設の設計をして欲しい。暖房熱源は太陽熱にしたい」衛生及び空調設備業界の長老・西原脩三、柳町政之助両氏が交々私に協力を求められた。「日本の復興のエネルギーに石油一辺倒は誤りだ。石油はいつか枯渇しよう。人の生命までも危くするに違いない。それを拱手傍観できぬというのが趣旨であった。完成した施設はドイツ誌等にも発表した。本格的な太陽熱利用による暖房、太陽熱によって自然・環境を護るという実例の嚆矢ではあるまいか。岸内閣時代、昭和33年春のことであった。

その数年後、私は国立劇場の舞台機構を諸々に考えた揚句、スイッチ一つで動作させることに決めた。ところが歌舞伎界の論客、当時の名優・左団次や中車、仁左工門等は「すべて人力で動かせ。駄目なら出演は断る」と譲らない。「スッポンは裏方が引き縄を手繰るとき、井戸掘りのヨイトマケと同じように縄がたる

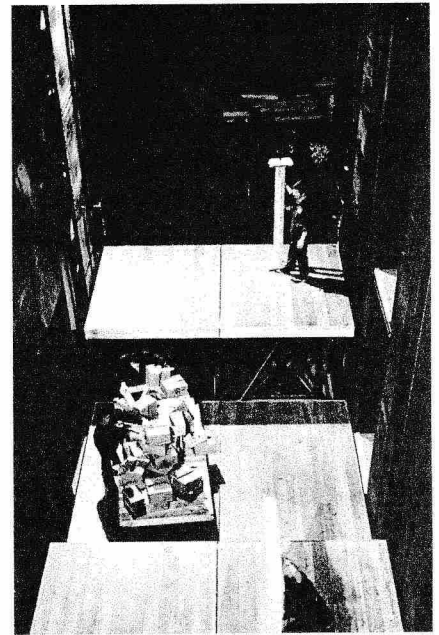
んで床が瞬間コトツと僅かに下る。迫り上るさ中の息を呑むの間こそ、スッポンの命なのだ」というのである。当時それを機械的に実現するのは不可能だった。しかし「本物を演れぬのならどんな便利な装置も無駄だ」という彼等の主張は矢張り正論だったと思う。その理解と劇場の将来の人手に対する不安とが私の脳中で激しく相克した。遂に私は決して、すべて電動駆動にしたのである。しかしこれは今なお心に引掛る。本物を護るということは、また途方もなく辛い。

私はこの約40年間に、石垣島から知床まで夥しい数の文化財の保存、防災について相談にのり、設計を行ってきた。そしてそのあるべき様を求める裡に、先人達がいかに後の世の幸のために身を削ってまでして、自分達の大切なものを護り、遺す工夫と改良の努力を重ねてきたかに驚かされてきた。地震、高温多湿の環境といった自然的、かつ多発の一途を辿る火災・盗難など人為的な災害に対して、大量の土と太い木材を使って頑丈なくらを造る。その外壁を漆喰に油を加えて鏡のように磨き上げ、室内の壁は樋部

倉矧の厚い木板で調湿し、箕ノ子床によって空気の流通を図る。そうした上でなお乾燥を嫌う収納物は、上の階に置くことを禁ずるのである。一方では物の安全のために建物の規模を制限し、外観と外構を整備したのだった。収納物が大切なものであればある程、くら自体が美しく、環境が整えられたのである。それは土地の気候・風土に根ざす住民の気質と美的感覚を下敷きにしてきたから、いつの時代にも日本人が心の奥底に求める共通の意匠に収斂し、風景を作ることになるのは当然だったろう。真に大切なものは個人の所有を解き放して、地域・社会が連帯して護り伝えて行くべきだという先人の認識が後に続く人々の英知を誘うのだらうと思はれる。物を確実に保存するには自然のエネルギーを最大限有効に利用する。同時にその環境を人の心にどう受け入れさせるかを追求する努力が、むしろ前者に対する努力以上に必要であると先人は私達を巻き込んで語りつつある。



INTERNATIONAL STUDENTS' RESORT HOME  
軽井沢国際留学生研修・保養施設（東棟）昭和33年、設計：筆者  
西原脩三氏が将来のエネルギー枯渇を心配し私財を投じ太陽熱暖房の施設を建設した。この西原氏の考え方が私の後の文化財は自然のエネルギーを最大限利用して護るべきであるという主張をする契機となった。勾配屋根が新開発の集熱アルミパネル



国立劇場舞台機構  
廻り舞台に設けた大小さまざまな迫り。三輪晃久氏撮影  
昇降駆動の方式及び周囲の安全壁は往時の長老級役者に計画  
当時猛反対されたが30余年たった現在では役者及び全舞台  
関係者から高く評価されている

## 大切なものを護る パートII 「建築計画の立場から」

我が国では古来古い建物を修理する時、根接ぎ・埋木に使う補足材の寸法は必ず既存の部材よりも大き目にとり、両材の接触部に段差をつける。また南側正面がいかに大切な建物でも、その南の側柱には節の多い木肌の荒い部分を南側に向ける。何故か。両者とも理由はまったく同じである。すなわち私達の先祖は修理する建物の将来の完全な形を夢に描き、何十年の後から以後の人々が見て美しいと感ずるであらうことに喜びを覚えるためなのであった。確かに接木の目違いや建物正面の柱に荒々しい節が多くあるのは見た目に良くはあるまい。しかし補足した部材が後々収縮して既存材と同一面になったとき、柱、つまり建物は本来の美しい姿になるはずである。また柱に瘤・節の多いのは、その面にそれだけ多く陽光と雨風が当るからで、内部の組織も強化される。その柱の肌面を建物の日光の直接当たる側に向けるならば、建

物は一層長く耐久性を保てよう。長い歴史の間に先人が割り出した手法であった。自ら手当した建物を後世に誇る自信をこゝに垣間みることができる。

讃岐・金丸座。現存最古の芝居小屋である。十年程前の春、「中村吉衛門等がこゝで歌舞伎を演りたいという。建物は重文だしどうだろう」と県から相談を受けた。重要文化財建物だからこそ演らすべきだ、そう私は即答し、結局3日間上演された。エンジンかけ放しで完全出動態勢の消防車3台が待機し、非常の時、即開放するためすべての窓・開口部に関係職員を配して、本来は許されぬ諸法規に対応したのである。この事実は全国の木造の歴史的芝居小屋を刺戟した。近年の商業劇場と異なり、舞台間口の狭い、素朴な設備の金丸座は、本来の古典歌舞伎を復活させ、毎年興業して地元を活性化し続けている。

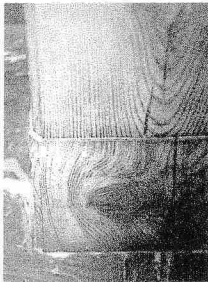
私の文化財の保存関係施設に直接関与する契機になったのは、戦後急速に衰退しつつあった古典芸能を確実に護り、伝承させるため早急に資料を保存・展示す

る施設を整備する必要がある、という国立劇場設立準備期の歌舞伎俳優と、小宮豊隆・久保田万太郎・河竹繁俊等の論議だった。ところが資料は種類、量、寸法、材質、形など限りなくまちまちで、大半は頻度多く激しく使用されながら、未だまでの保存を厳しく要求する。しかも脆弱で毀れ易い。それらを護り末永く生きながらえさせる空間はどう計画すればよいか。考え倦めた末、伝統的な土蔵を選び、かつ既存のRC造の文化財収蔵庫の実態を調査して、設計方針を定めることにしたのである。爾来早くも35年経った。その間文化財の保存・防災関係施設の建設に携った数は千数百件を記録した。だからこそ文化財を護り伝える施設の設計には、建築家と建築史家及び所有者間相互の対等な論議が必要だと痛感するのである。過去にはそれが余りにも少なかった。そのために大変な結果を招いた例も実は存在する。近代科学に対する従来の考え方が見直されはじめた今日、改めて先人の伝えをこの三者が互いに服膺し協力することが必要だと思う。



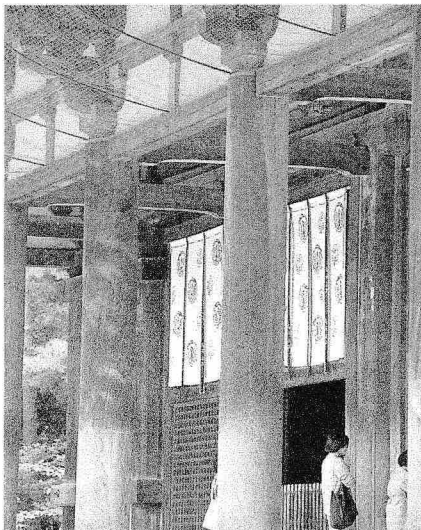
柱の根接ぎの例

上部の古桧より新補する取替式の断面を大きくとる。可能な限り年輪も似たようなものを選んでみる。材の種類にもよるが、この例では新旧材の目違いは10程度であった(重要文化財・美保神社本殿)



柱の向きと接ぎ方

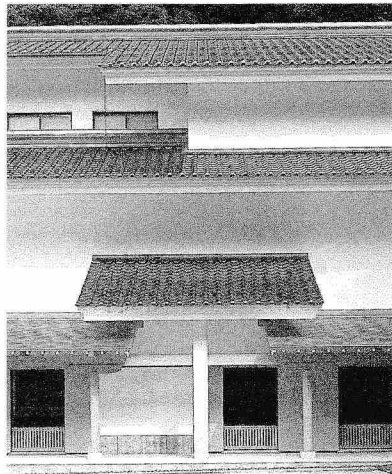
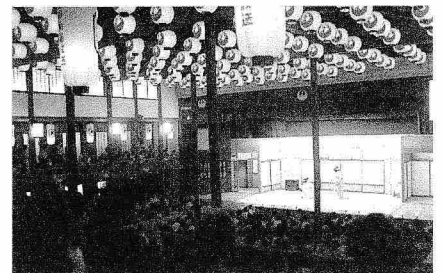
柱列の美しさでは類例のない唐招提寺金堂(国宝)正面丸柱の正面の肌荒々しいのが判る、これらの柱は明治時代中頃に地上1.8m程度の高さの位置で接ぎ木された。100年経った現在では目違いはほとんど目視できない。



金丸座

日本で現在最古の劇場(重要文化財)天保6年(1836)創建昭和50年に解体移設されて現在の姿になった保存修理設計:(財)文化財建造物保存技術協会

客席は研席。舞台間口が狭く演技も必然的に象徴的になる。舞台の演者と客席の見物人は手を握りあえる程近く、両者は一体となって芝居を楽しむ



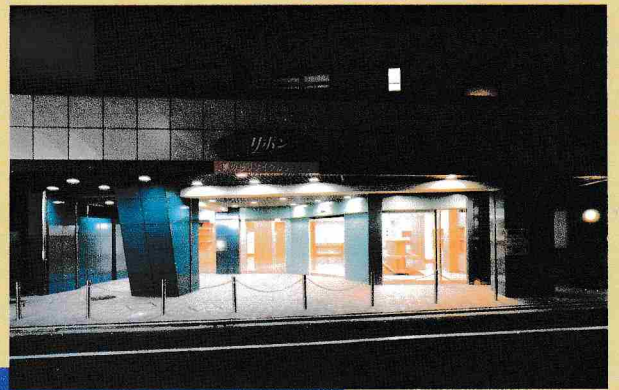
重要有形民俗文化財 美保神社(鳥根県)奉納鳴物864点、諸手船2隻他保存収蔵庫

設計:筆者十柳アーキテクト

我が国伝来の土蔵のメカニズムを再現し、かつ重要文化財本館の直近に立つことを考慮して油ジックイ、石見瓦、チタン文字管等により意匠を定めた。建物規模が大きく空調設備は設けたがほとんど不要。自然のエネルギーのみで内部の保存環境を保っている。



シティコート世田谷緑田 高階高住宅



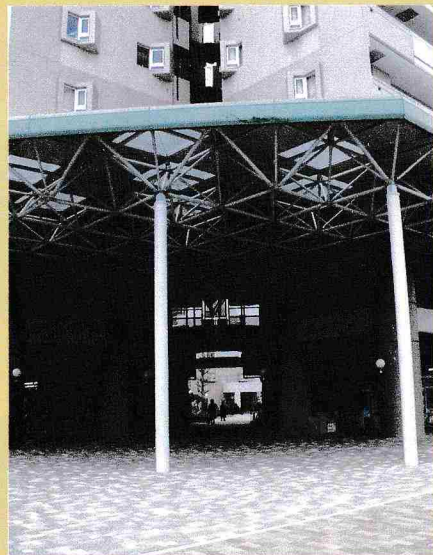
旅の台のサイクルショップ「リボン」



東京都教職員小笠原(母島)住宅



神代団地



クーンカウビル 一番街南棟

一人 空間 文化 出会い



株式会社 **集研設計**

新宿区荒木町5番地 SEIビル  
TEL 03(5363)7061・FAX 7062